

# 未就学の子どもたちに対する指導目標と課題

- センター「就学準備クラス」の例をもとに -

池上摩希子

大沢 操子

## 目次 0 . はじめに

### 1 . 就学準備クラスの目標構造

#### 1 - 1 . 「就学準備」の意味

#### 1 - 2 . センター「就学準備クラス」の方針

#### 1 - 3 . 目標構造表

### 2 . 指導の具体例

### 3 . 今後の課題

## 0 . はじめに

中国帰国者定着促進センター（以下、センター）では、第48期（1995年10月～96年1月）において、初めて未就学の子どもたちを中心とする「就学準備クラス」が作られた。それまでは、就学年齢の二世三世はほぼ全員が「中学生クラス」か「小学生クラス」に所属して研修を受けていた。入所生に未就学の子どもがほとんど含まれていなかったこと、地域の保育園にお世話になったこともあったこと等から、研修の対象とはならなかったのである。しかし、帰国者の帰国事情の変化に伴い、センター入所生の年齢構成にも変化が見られるようになった。具体的には、平成6年度から残留婦人の永住帰国が国の援護体制に組み入れられ、センターが帰国直後の受け入れ機関となったことで、同伴家族として幼い三世が増加した。また、孤児も60歳以上<sup>1)</sup>であれば、別所帯であっても二世の一家族を同伴できるようになったことから、孤児三世の子どもたちも入所し、その中には、就学前の年齢の子どもたちも含まれるようになった。

これらはセンターの事情だが、帰国者事情全体を見ても、家族の「呼び寄せ」の増加から、三世世代の増加が言われている。帰国者が集中している地域のひとつ、長野県で日本語教育に関連するニュースを集めたもの<sup>2)</sup>には、

「外国語使う園児240人 上田女子短大講師ら全県調査 戸惑う現場の声 文化の違いなども悩み」（信濃毎日朝刊94.09.07）、「園児の国際化進む 言葉、習慣の違い戸惑い 保護者へ支援必要 下諏訪町内の保育所」（長野日報朝刊95.07.04.）等といった見出しが見られる。日本語を母語としない子どもたちの増加はここ数年言われていることであるが、就学前の年齢の子どもたちへの対応も日本語教育の課題となってきたようである。

センターでの「就学準備クラス」の試みは、まだ蓄積と言えるほどのものではない。しかし、以上のような状況にあっては、試みをまとめて紹介しておくことは、今後の「幼児増加」状況に対応するために必要だと思われる。本稿では、センター第48期と第51期（1996年10月～97年1月）の「就学準備クラス」を取り上げて、実践を通して作成した指導目標の構造表を紹介し、また指導の具体例を紹介する。

## 1. 就学準備クラスの目標構造

### 1 - 1. 「就学準備」の意味

センター就学準備クラスの対象者は、センターでの4ヶ月の研修を修了した後、定着地で日本の小学校一年生に編入する予定の子どもである。中国の学校制度が日本のものと同じではないことから、年齢は一律6歳というわけにはいかず、5歳から7歳と幅がある。子どもによって、中国の幼稚園などで就学前教育を受けている場合も受けていない場合もある。また、保育園などで集団生活を経験している場合もしていない場合もある。その子どもがどのような生活を送ってきたかにより、発達の度合いに多少の差は見られるが、どの子どもも日本の小学校に編入もしくは新入学することになる。

就学前の子どもが新入学するために最低限必要とされていることを（碓井・待井、1970）を参考にあげてみる。

学校生活に対する心構えを作ること

生活習慣を整えること（排泄、着衣、脱衣など）

健康に注意すること（生活が変化し疲労に陥り易いことから）

などの他、

自分の名前の読み書きができること、自分の持ち物に対する観念をつくること

などがある。子どもが小学校に新入学しても支障のないように指導することが「就学準備」指導の目標であるが、異なる文化の中で生育してきた子どもたちの場合、文化的背景やことばの相違から、なかなか「新入学しても支障のない」ようにはいかない。それでも上記の観点は押さえておいて、できるだけ困難を軽減したいところである。

## 1 - 2 . センター「就学準備クラス」の方針

センターでは、次の2点を「就学準備クラス」の重要な方針として指導を実施した。

### 1) 家庭との協力

子どもたちは家庭での生活を主とし、その生活の保障や指導は保護者が大部分を担当している。したがって、特に生活習慣や躰に関しては「家庭での指導 + センターでの指導」という協力体制が重要になってくるが、子どもたちの家庭が日本の文化的背景とは異なる文化に依っていることに注意したい。指導する側が保護者に求めることがらを理解してもらうためには、子どもの家庭が異なる文化的背景にあることを常に念頭において、丁寧に説明し協力を要請する必要がある。

このとき、生活習慣の指導や躰は、異文化である日本文化への「同化」を促すものとは捉えず、子どもが社会化していく上で最低限必要なルールの習得を促すものと位置づけたい。習慣や躰について、中国式か日本式かを選べる範囲では保護者に積極的に選んでもらってよいと思われるが、衛生や身辺自立など子どもの生活に最も重要で基本的な習慣は、何式であれ身に付ける必要がある。

### 2) 「日本語を」ではなく「日本語で」

一般に、幼児期は話しことばが伸長する重要期であると言われている。技能別には「聞く 話す、読む 書く」の順に発達し、音声言語の基礎の上に文字言語の学習が始まる。子どもは周囲の大人や子ども同士の仲間と言語的なやりとりをし、絵本を読んでもらったりテレビを見たりしているうちに、生きたことばをどんどん吸収していく。文脈に埋め込まれ生活経験と結びついて始めて、ことばは

意味をもったことばとして獲得される。その結果、子どもはことばを使いこなせるようになるのである。

日本語を母語としない子どもたちであっても、5～6歳といった年齢を考えると、状況は同様であろう。就学前の子どもたちには「日本語を」外国語として指導することには無理がある。「日本語で」様々な活動を行い、それを通して日本語を生きたことばとして吸収させたいと考える。

### 1 - 3 . 目標構造表

小学校低学年クラスの目標構造表を参考にして、小学校に入学する前に「これだけは身に付けさせたい」という項目を選択し作成した「目標構造表（就学準備タイプ）」を次に掲載する。目標構造表の構成や考え方についての詳細は、佐藤・小林（1994）を参照されたい。

<タイプ別目標構造表（就学準備タイプ暫定版）>

中目標 1：学校生活、日常生活に必要な基礎知識・基礎技能を身に付ける

小 目 標	達 成 目 標	リ ス ト
1)「模擬学校」としてのセンターでの生活に必要な基本的習慣を身に付ける	<u>日直の仕事</u> を理解し、 体験する	教室内外の整備（チョーク、その他の備品、掃除）、教師との連絡、昼食関係（食券、配膳、後片づけ）、号令
	<u>センターの規則</u> を守って行動できる	時間、飲食の禁止、内履き外履きの区別、身分証の携帯、教具や遊具の管理、公共物の利用、衛生（ごみ処理等）、事務室の入退室、外出時の団体行動
	保護者に <u>連絡</u> ができる	授業参観・三者面談・家庭訪問・社会科見学・写生大会等のお知らせ、連絡帳、弁当等持ち物の準備

	<p><u>基本的な生活習慣</u>を身に付ける</p>	<p>歯磨、手洗い、爪切り、ハンカチ・ちり紙の携帯、トイレの利用、食事の取り方</p>
<p>2) 日本の小学校生活のイメージを持つ</p>	<p><u>小学校・小学生事情</u> / <u>小学校生活</u>について知る</p>	<p>小学校見学、簡単な知識（小学校の一年、小学校の一日）</p>
	<p>行事 / <u>学校行事</u>を体験する</p>	<p>授業参観、三者面談、家庭訪問、社会科見学、七夕・クリスマス等季節の行事、発表会、クリエーション活動（フルーツバスケット等）</p>
<p>3) 学校外の生活行動場面に必要な知識と技能を身に付ける</p>	<p><u>交通ルール</u> / <u>交通ルールや注意事項</u>を守って安全な登下校ができる</p>	<p>車は左人は右、信号、道路・踏切の横断、危険行為</p>
	<p>交通 / 教師の引率の下、電車やバスの利用を体験する</p>	
	<p>訪問 / 友達の家を訪問する際の<u>基本的なマナー</u>について知る</p>	<p>和室でのマナー（靴の揃え方、お茶の飲み方）、食べ物の断り方、挨拶（こんにちは、いただきます、ご馳走様等）</p>

は両親の協力が不可欠な項目

中目標 2 : 学習活動に必要な基礎知識・基礎技能を身に付ける

小 目 標	達 成 目 標	リ ス ト
1) 日本の小学校の教科内容についての基礎知識と基礎技能を身に付け、教科の活動とそれに伴う受け答えに親しむ	音楽 / <u>音楽の活動</u> に親しむ	カステネット、ピアノカ、日本の歌
	図工 / <u>図工の活動</u> に親しむ	作画（クレヨン、色鉛筆、絵の具）粘土、紙工作
	体育 / <u>身体を動かす活動</u> に親しむ	整列、ラジオ体操、縄跳び、遊戯
	算数 / <u>数の操作や図形認識の元になる概念</u> を身に付ける	数の概念、一桁の数の加減、図形の識別、図形の並び替え
	国語科 / マナーを守って先生に本を読んでもらう	
	生活科 / <u>身近な社会や自然のことがら</u> に関心をもち、 <u>生活科の活動</u> に親しむ	見学、自然観察、簡単な実験（触ってみよう、鳴らしてみよう等）
	<u>文房具 / 文房具</u> の使い方に慣れる	はさみ、糊、ホッチキス、パンチ、クレヨン、色鉛筆

中目標 3：小学校生活及び学習活動の基礎となるコミュニケーション力を身に付ける

小 目 標	達 成 目 標	リ ス ト
1) 学校生活や 学習活動の基礎 となる日本語を 身に付ける	文字 / <u>日常よく使われ る文字が読める</u>	身近な語彙の平仮名表記、自分の名前 (漢字 表記・平 仮名表記)
	やりとり / 場面に 応じて <u>コミュニケーション することができる</u>	返事、挨拶 (毎日の挨拶、入退室の挨拶)、お礼、謝罪、自分のことに関する質問に答える、わからないときに 「わからない」または「教えて」と言える

## 2. 指導の具体例

それでは、実際にどのような指導を行ってきたのか、48期と51期の実践から紹介していく。

前述したように、51期 (1996年10月～97年1月) にセンターでは2度目の就学準備クラス<sup>3)</sup>ができたので、その1年前に実施された48期の指導と小学校低学年クラスの指導項目も参考にして、就学準備クラスの目標構造表は作成された。従って、目標構造表をもとに行うプログラム設計も、同様に48期低学年クラスを参考に、その内容を検討していった。

ここでは3つの中目標 「学校生活に必要な基礎知識・技能」 「学習活動に必要な基礎知識・技能」 「基礎的コミュニケーション力」に沿った指導の具体例と、1 - 2 . の方針のところ述べた 「家庭との協力」の具体例を紹介する。

### 学校生活、日常生活に必要な基礎知識・基礎技能を身に付ける

【日直の仕事】センターでの日直の仕事には、宿題を集める、配る、教室の掃除をする等がある。子供たちが具体的な仕事や役割をこなすことで、教師と子ど

もたちとの日本語でのやりとりが内実を伴ったものとなり、生きたことばとして働く。それとともに、学校生活の習慣の一部が意識化されることをねらっている。簡単なことでも、集団生活をしたことがない子どもにとっては、日直の仕事は「決まった時間に決まったことをする」よい練習になった。また、時計が読めない子どももこうした活動を通して、「わかる時刻」を増やしていくことができた。

【衛生検査】食前の手洗い、ハンカチちりがみの持参、爪切りといった衛生面の躰は、大切であるが難しい問題でもある。衛生検査では、上記の項目について、毎朝検査をした。すべて良い場合は検査表にシールを貼ることにより、衛生について気をつけることを習慣付けようとした。子どもたちはシールをもらえるのがうれしくて、喜んでハンカチちりがみを持ってきたが、困ったことに必要なときにあまり使わなかった。また、ハンカチなどもあまり洗濯をしないようで、清潔さに欠けることもあった。こうした点については保護者にもよく説明し、時に注意をすることで協力を依頼する等、 に結びつく指導を行うこともできた。

【上履き洗い】毎日使っている上履きを週末には洗わせたが、自宅に持ち帰って次の週に持参するのは難しかったので、教師が洗い方を教え、生活科の授業として一緒に洗って教室に干すという活動を組んだ。靴を履き替えるという習慣のない子どもには、上履きと外履きの区別は何度も繰り返し注意しないとなかなかわからない。上履きを洗うことで、そうした区別や清潔さについても伝えたいと考えた。こちらの意図はどうか、子どもたちは水を汲んでブラシと石鹸を使って上履きを洗う作業を楽しんでいたようだ。

【小学校見学】センター近辺の小学校に、小学生クラスの年長の児童と共に見学に行った。実際に小学校を訪問し、学校の施設や授業の様子を見学して日本の小学校の雰囲気を知るとともに、センターを修了したら自分たちも小学校に行くのだとの自覚を促したいと考えた。

【交通安全と交通機関の利用】センターの外へ出る機会を週に1～2回つくり、その度に交通安全指導をした。中国と日本では交通事情が違う上に、日本語だけの指導では危険が伴うこともあり、外出の一回目のときは中国語での指導を取り入れた。「二列に並んで歩く。道の右側を歩く。信号を守って横断する。」といった注意を中国語で伝えるとともに、実際の行動を通じて学習していった。また、活動の目標ではないが、バスの乗り方を知るために、「バスに乗る時には並んで



順番に乗る。自分のバス整理券を取る。降車時にはお金とバス整理券を一緒に料金箱に入れる。」といった項目も行動を通じて学習した。一回目はわれ先に乗る、教師から渡されたお金をなくしてしまう等の問題もあったし、「僕が、私が」となりがちでもあったが、団体行動の練習としての意味も込められているので、教師の注意を受け、回を重ねるうちにだんだん慣れていった。

【文房具の使い方】学習の前段階として、文房具の使い方を知り、使えるようにするのが目的である。中国で幼児教育を受けていない場合は特に、文房具にあまり触れていない子どもも少なくない。鉛筆・クレヨン・色鉛筆・ハサミ・糊等の文房具を、図工やその他の作業のときに努めて使わせるようにした。動物の絵に色を塗って、その動物の名前を覚えたり、外で電車に乗る前には、紙で簡単な電車を作ったりした。はじめはクレヨンを使わせても手当たり次第塗っていた子ども、4ヶ月の研修が終わる頃には必要なところに塗れるようになっていった。

【学科】音楽・体育・図工については、まず用具に親しむことが目標となった。また、用具を借りたり返却したりすることも大切なコミュニケーション行動となった。算数では、おはじきや色板など小学校低学年の算数科で用いる教具を多用した。

### 小学校生活及び学習活動の基礎となるコミュニケーション力を身に付ける

【やりとり】子どもたちのクラスでは具体的な物がないと、なかなか活動がなりたたない。例えば、家族についてやりとりを行う場合も、教材として自分の家族の写真をコピーしてノートに貼ったものを用意し、これを指さして、「おばあちゃん、お父さん、お母さん、お姉さん、僕」と紹介する練習をした。また、家族の名前も中国名であっても日本語読みで言う練習をした。

【語彙】子どもの好きな動物、食べ物等は「好きな食べ物はなに?」「この果物何色?」「これは何?」と問いかけながら、同じ単語を機会をとらえて何回か聞かせると、自然にその語を覚えた。また「おはよう」「さようなら」のような挨拶も、必要なとき適切な場面で何度も繰り返し聞かせていると、よく聞いて、すぐに自然に出てくるようになった。教師が子どもに対してよく言う「だめですよ」「来て」等の注意や指示はすぐに覚えて、驚くほどタイミングよく発話され、苦笑してしまったこともある。50音を覚えさせたいと思って指導した

「あし、いす、うち、えんぴつ、おかし」といったアイウエオ順の単語は、文字としては覚えられなかったが、語彙としては覚えることができた。子どもにとって親しみやすい具体的な物ほどよく覚えることができた。例えば「すいか」「おかし」などは覚えやすかったが、「れんらくちょう」「なふだ」などは毎日使うものではあっても、なかなか覚えられなかった。これは教師の意図とは違ったところである。

### 家庭との協力

【お知らせプリント】家庭と協力するために最も必要なのは連絡で、そしてその方法も日本ではお知らせプリントが使われることが多いので、センターでもいろいろな場面でお知らせプリントを出した。子どもたちにも親たちにも、その重要性を意識して慣れてもらいたいからである。教師から伝えたい行事のお知らせ等は、子どもたちが文字が書ければ連絡帳に書かせることもできるが、文字はまだほとんど書けないので、中国語で書いたプリントを連絡帳に貼らせて父母に知らせた。出欠席等返事を返してもらわなければいけないものは、何度も練習が必要だった。子どもが親に渡さなかったり、親がよく見なかったり、また、教師側にもどす分の書き方が正確ではなかったり、その度に子どもと親の両方に注意を促した。

【送り迎え】子どもの年齢が低いことだけでなく、教具・遊具が十分揃っていないといった制約もあり、センターでは修学準備クラスは、1日4時間<sup>4)</sup>の指導とした。子どもたちは4時間の授業が終わると保護者に伴われ研修棟から宿泊棟へ帰宅した。大体は両親のどちらかと帰るが、その親が自分の学習の都合（一日外出している実習など）で送り迎えができない場合は、代わりに子どもの祖母が当番になったり、親同士で融通を利かせて役割を分担したりした<sup>5)</sup>。その週の送り迎えを家族の誰がするかについては、父母から教師に子どもを通じてお知らせプリントを回して知らせてもらうようにした。こうしないと、送り迎えを忘れてしまう親もいたのである。研修当初は特に担任が親に送迎の重要性を知ってもらい、また親の方の担任にも知ってもらい、センター全体で協力して親に保護者としての自覚を促した。

【弁当】行事に弁当を持っていく習慣は、中国にはほとんどない。そこで、社

会科見学で市外にある公園へ行ったときは、日本の学校の弁当の習慣について保護者に学習してもらってから、各家庭に弁当箱を貸し出し、弁当を作ってもらった。当日、子どもたちはごはんに親の手作りの中華風おかずを添えたものをそれぞれ持ってきた。

【親子教室】51期では親子教室を開催した。親に子どもの学習の様子を知ってもらい、学校での授業参観などに慣れてもらう目的を持って試みた。普段送り迎えをしている保護者（父親4人、母親2人）と子ども6人が参加した。「大きな栗の木の下で」の音楽に合わせて子どもに倣って一緒に遊戯をしたり工作を共同でしたりした。このときは、ティッシュの空き箱2つを使って、本立てを作り、ハサミ・糊・色紙・折り紙を使って仕上げた。子どもは折り紙で花や車を切り抜き、親は細かい仕上げをするといった分担で工作をしたが、子ども達はいつにもなく神妙で、親達は楽しげだった。このように、4ヶ月の研修を通じて、子どもを通して子どもの指導と関わりがあったので、親の保護者としての自覚も高まってきたように思う。

### 3. 今後の課題

以上の実践をふまえて、今後の課題として次の3点をあげておく。

活動案の蓄積

子どもの母語の問題

保護者の課題

日本語が母語でなく集団生活の経験が少ない子どもの場合、どのような活動なら楽しく無理なくできるだろうか。援用可能な活動案として、試行錯誤の結果を蓄積する必要がある。

また、子どもの年齢を考えると、母語は日本語になっていくだろうという予想ができる。来日年齢が5～6歳であり、今後日本で生活し教育を受ける子どもであるから、現在の母語の中国語にこだわらず、将来的に日本語が母語として確立してもよいと考える。何語であれ母語が確立しないことの方が問題は大きいからである。しかしながら、これは研究結果があつての結論ではなく、あくまで経験に基づく意見であり、実証的な研究と検証が待たれるところである。

最後の課題は、就学前の年齢の子どもを持つ保護者が学習者である場合を想定

している。センターでは「就学準備クラス」の子どもの保護者はすべて、同時に他のクラスの学習者である。親自身、日本語日本事情を学んでいるプロセスにある。その場合、子どもの保護者に対して求められることがらは、保護者に対する指導の重要な目標や項目となり得るであろうし、保護者に対する適切な指導なくしては、就学前の年齢の子どもたちに必要な指導は難しい。それだけに、保護者に支援を行う立場と子どもに支援を行う立場の双方で連携を取っていく必要があると思われる。センターにおいても、この点は今後の課題として目標構造などに反映させていきたいと考えている。

#### 【注】

- 1) 平成9年度よりこの年齢基準は引き下げられ、「55歳以上」となった。これにより、低年齢の三世の増加の可能性はさらに大きくなると思われる。
- 2) 上田女子短期大学(1995)(1996)より引用。これらのデータは同論集に「地方紙データ・ファイル」として掲載されている。信濃毎日、長野日報と朝日・読売・毎日・産経・中日の各地域面、の他各紙から「日本語教育」に関する話題を採集した、とある。長野日報朝刊(95.07.04.)の記事には、『「国際結婚や外国人雇用などに伴って、下諏訪町内の保育所は園児の国際化傾向が顕著になっている。こうした傾向は同町に限らず、諏訪六市町村のいくつかの保育所でも見られるようになり、言葉のかべや生活習慣の違いなど保育現場で抱える問題は多く、教育現場も含めて、「今後いかに対応していくか」が大きな課題となっている。」とあり、対象となっているのは帰国者の子どもたちだけではなく、問題は広がりを見せていることがわかる。
- 3) この51期のクラスは、年齢別でいうと5歳児6歳児各3人、男女別でいうと男女3人ずつの構成で計6名であった。中国での集団教育の経験については、保育園等で3年ある子どもから全く経験のない子どもまでと異なっていた。1月末にセンターの学習を終え、4月からは小学生になる予定の子どもであった。
- 4) 親のクラスを含めて他のクラスは一日6時間の指導が基本である。従って、宿舎へ子どもを送っていく保護者は、自分のクラスを早退しなければならない。幼稚園教育では一日4時間が標準ということである。

5) 51期の例では、仲のよい女の子2人の親たちのうち3人が交代で当番になり、親としての役割を果たした。交代ということでその日送って行かない親は、自分の学習時間を毎日送っていくよりは多く確保できた。

**【参考文献】**

上田女子短期大学(1995)『三郎山論集第2号』

上田女子短期大学(1996)『三郎山論集第3号』

碓井隆次・待井和江(1970)『保育小辞典』ミネルヴァ書房

岡本夏木(1995)『小学生になる前後』岩波書店

佐藤恵美子・小林悦夫(1994)「カリキュラム開発および理念的目標の構造化について」『中国帰国孤児定着促進センター紀要第2号』

和田玉己(1996)「小学生クラス(低学年)における文字指導の試み - カタカナ絵単語を使って - 」『中国帰国者定着促進センター紀要第4号』